文 化 財 学 習 会

ふ　る　さ　と　探　訪

テーマ　堂山山麓に社寺を訪ねる

講　師　廣瀬　和孝

（高松市文化財保護協会顧問）

平成２４年３月１８日（日）

共　催　高 松 市 歴 史 民 俗 協 会

高 松 市 教 育 委 員 会

1　山崎の地名

西山崎町は、高松市の西方に位置し、西に堂山を中心とした三〇〇メートル前後の丘陵地があり南が高く北が低い地形となっています。「山崎」の地名の由来については説が分かれており、堂山山麓にある八幡神社が、山城国（現京都府）の山崎神社から勧請されたためとする説、摂津国（現在の兵庫県・大阪府にまたがっていた地域）の豪族山崎氏が当地に移住したためとする説、丘陵地が崎のように突出しているためとする説があります。

山崎の地は、古くは中間郷（なかつま）に属していました。中間郷は、現在の岡本町、西山崎町、中間（なかつま）町にあたります。中間郷について注目されるのは、天平勝宝四年（七五二）に東大寺へ封戸五十戸、宝亀十年（七七九）に唐招提寺（しょうけい）へ封戸が施入されていることです。このことは、現在、正花寺に菩薩立像が所蔵されていることと関連があると考えられています。

なお、高松市東部にある「山崎」の地名については、山城国の山崎神社から勧請された神社があることがその由来とされています。現在、この東部にある山崎を東山崎町、当地の山崎を西山崎町と呼称しています。

ことでん岡本駅から堂山（写真奥側）へ向かう道中に立つ、金毘羅燈籠

2　本堯寺（ほんぎょう）

宗派　法華（日蓮）宗本能寺派　宝珠山浄住院本堯寺

由来　天正年間（一五七三～九二）羽床伊豆守資載（いずのかみすけなり）の妻（すけなり）本法院が、長宗我部元親の讃岐侵攻の戦いで敗れた夫資載の冥福を祈るため、阿野（あや）郡南条羽床下村（現綾歌郡綾川町羽床下）に法華宗の本法寺を建立したのにならい、伊豆守資載（すけなり）の弟、弥三郎資国が本法寺の南隣に一宇を建立したのが本堯寺の始まりといわれています。その後、宝永～正徳年間（一七〇四～一七一六）頃、現在の西山崎の地に移転したということです。

境内には、松平頼該（よりかね）（左近）とその一族の墓所があります。

※　松平頼該（よりかね）（左近（さこん））

文化六年（一八〇九）、第八代高松領主松平頼儀（よりのり）の長男として、江戸小石川の高松藩邸で生まれました。生母の綱

本　堯　寺

松平頼該（左近）の一族の墓

子は法華宗の信仰が厚く、頼該（よりかね）も小さい頃から母の影響を受け、法華宗を熱心に信仰していました。頼該は、通称を「左近」、雅号は「金岳」と称し、文武の才に長け、華道・茶道・書道にも秀で、芝居や能などの文化に深い関心を持ち、仏典にも精通していました。

尊皇心が厚く、幕末には、日柳燕石、長谷川宗右衛門、小橋安蔵ら同郷の志士を援護し、長州の久坂玄瑞、桂小五郎らが讃岐に来た時には庇護しました。

高松藩が、慶応四年（明治元年・一八六八）一月の鳥羽・伏見の戦で旧幕府軍に加わり、官軍と対戦したことから朝敵とみなされ、罪を問われることとなったとき、頼該は大義名分を説いて藩内の異論を抑え、朝廷に対して恭順の意を示させました。同年八月、頼該は六十歳で亡くなりました。遺命により、本堯寺の境内に御廟所（ごびょうしょ）が建立されました。頼該の御廟所は、本堂の北東にあって、本殿・釣屋・拝殿からなり、本殿内中央に約三メートル余りの大きな墓があります。

頼該（左近）の墓

松平頼該（左近） 御廟所

3　北岡城跡

仁和二年（八八六）～寛平二年（八九〇）、菅原道真が讃岐守（国司）に任ぜられ、讃岐に滞在して政務を執っていた時期、朝鮮渡来系氏族である讃岐秦（はたうじ）氏の子孫といわれる秦久利（はたのくり）が中間郷一帯を治めていたと伝えられています。秦氏は、すぐれた知識や技術を持ち、早くから香川郡を中心に地域の開発を進めて財力を蓄え、有力な豪族に成長しました。

讃岐在任中、道真は、観音寺の日儀、滝宮龍燈院の僧空澄、長尾宝蔵院の明印法師、高松長命寺の住職増圭といった有識者らと屋敷を行き来し、和歌や詩のやりとりをして親交を深めたといい、秦久利の居所も時々訪れたといわれます。秦久利は、文学を修め、才に長けた忠誠心の強い人だったといわれ、道真とは特別な親交がありました。道真は、年老いた秦久利に一人娘しかおらず世継ぎの男子がいなかったことを憐れみ、菅原家一族の男

久利長門守之碑

北　岡　城　跡

子を婿養子として与え、跡継ぎとして久利長門守（くりながとのかみ）と名乗らせたということです。以後、子孫は久利を名字（みょうじ）とし、戦国時代には北岡城に拠って活躍します。北岡城の場所は堂山の東麓、現在の西山崎町上所下にあり、城址付近は小高い林になっていて、現在「久利長門守之碑」の石碑が建っています。

4　綱敷（つなしき）天満神社

祭神　菅原道真

讃岐の国司として四年の任期が満了し、寛平二年（八九〇）、京都に帰った菅原道真は四十六歳、宇多天皇の信任が厚く、蔵人頭（くろうどのとう）に任ぜられ、権大納言に進み、右大将を兼務し、昌泰二年（八九九）、醍醐天皇の御代についに右大臣となりました。しかし、左大臣藤原時平ら藤原一族の謀略により、昌泰四年（九〇一）一月、九州の大宰府の地方官である大宰権帥（だざいごんのそつ）へ格下げする左遷命令が下されます。大宰府へ配流される途中、道真の乗った船が讃岐国の沖にさしかかった頃、暴風雨のため、笠居郷の天神鼻（現在の

綱敷天満神社

香西神在鼻）に停泊しました。笠居郷の人々は道真の仁徳を慕い、久利長門守らは道真に謁して、懐旧の涙を流しました。このとき長門守が道真を案内しようとしましたが許されず、船綱を巻いて敷物としその上に道真を案内したことが、綱敷の名前の由来であるとされています。

久利長門守はその後、密かに筑紫に赴いて道真を訪ねたところ、道真はたいへん喜び、「思ひきや心つくしのはてに来て　昔の人に今逢はんとは」と和歌を詠み、鏡に向かって自らの姿を描き、これに飛梅の種を添えて長門守に与えました。道真が延喜三年（九〇三）二月、五十九歳で大宰府で亡くなった後、長門守が神廟を建てて道真から賜った自画像をお祀りしたのが今の宮所といわれています。以後、久利氏の子孫が代々祭事を営みました。社殿は天正年間（一五七三～九二）に兵火に遭い炎上しましたが、神影は無事で祠が再建され、藩主の生駒家、松平家も度々参詣しました。

綱敷公園内の五色梅は、久利長門守が道真から賜った飛

（綱敷天満神社境内）

梅の種を持ち帰って植えたところ、芽を出し枝葉を繁らせて五色の花を咲かせたと伝わっているものです。

道真は、生まれ年の承和十二年（八四五）が丑年（うしどし）、生誕日の六月二十五日も同じ丑の日、生まれた時刻が丑の刻（午前二時頃）で、五十九歳で亡くなった日も生誕日と同じ二十五日であり、丑＝牛とのつながりをいわれる所以（ゆえん）となっています。

5　正花寺（しょうけい）

宗派　高野山真言宗（高野山派）　龍尾山清光院正花寺

本尊　不動明王

寺伝によれば、天平年間（七二九～七四九）に行基菩薩が本尊の不動明王を彫刻し堂塔を建立して松慶寺と号し、山崎八幡神社および綱敷天満神社の別当寺としたということです。後の天正年間（一五七三～九二）、長宗我部の兵火により堂塔をすべて焼失しましたが、本尊は残り、後に快政法師が堂宇を再建し、初代高松藩主松平頼重に信仰され、正華寺と改めました。その後、二代藩主頼常により正花寺と改称されました。

正　花　寺

※　木造菩薩立像〔国指定重要文化財（昭和三十年二月二日指定）〕

カヤの一木から彫り出された、県内最古で最も美しい菩薩像です。お躰と台座の蓮肉まで共木で造り出す方法やそのお姿が唐招提寺（とうしょうだいじ）の木彫群、とりわけ衆宝王菩薩（しゅほうおう）立像に非常に似かよっています。大ぶりな髪の形や腰に石帯（せきたい）と呼ばれる帯を締め、そこにわずかに裳の折り返しを表現している所、衣の襞の意匠や彫り口など極めてよく似ています。しかし、唐招提寺像は、大ぶりで唐風の顕著な彫刻なのに対し、正花寺像はやや和風化され、顔の表情や肉取りが穏やかです。造像は奈良時代末頃かと考えられています。天平時代（七一〇～七九四）後期、一木造りというまったく新しい手法による造像が唐招提寺や大安寺で始まり、やがて、次の平安時代に盛んになりました。正花寺像は、これから始まる木彫時代の草創を飾る仏像としても、彫刻史上意義のある仏像といえます。

木造菩薩立像（正花寺）

6　山崎八幡神社

祭神　応神天皇

由緒　昔、山城国（現京都府）の山崎神社から勧請したものであると伝えられています。古くは東面に鎮座していましたが、社前の道を乗馬で過ぎる時には必ず落馬して怪我をするということから、天和三年（一六八三）五月、南面に改造したといわれています。

天明二年（一七八二）、宝蔵を補修する際、棟梁の選定で論争が起こり、決着しなかったとき、中間村の政所・尾崎甚兵衛敷武という人が霊夢により一首の和歌を得ました。それは「とり曇り、あやめもわかぬ、五月闇、錦をそれと、知る人もなし」という和歌で、このことにより人々は畏れ敬い、すぐに論争は止み、宝蔵の修理が完了したということです。

寛政年間（一七八九～一八〇一）八月の祭礼の際、氏子が集まって座席の高下を争い、このことが神慮にふれたとみて恒例の祭日を延期しましたが、社前の石鳥居が風もないのに折れたため、氏子らは神意に悖（もと）るものと戒めて直ちに祭礼を執り行ったということです。

山　崎　八　幡　神　社

明治の神仏分離以前は、正華寺（現正花寺）が別当として祭祀にあたっていました。

7　大石神社とムクノキ

伝説によれば、中間郷の豪族であった秦久利の一女（一人娘）が後年、白血、長血の病にかかり永い年月病床で苦しみ耐えかねて、臨終の時、この世を去った後は、神を厚く信仰する人の病気を治してあげたい、と言って息を引き取ったことから、後世の人々がこの地に大石神社を建てて お祀りしたといわれています。地元の人には「大石さん」と呼ばれ親しまれている神社です。

また、大石神社境内にあるムクノキは、胸高幹周り（むねたかみきまわ）四・六メートル、樹高二十二メートルの大木で、枝葉の広がりは東西約二十二メートル、南北約三十一メートルもあります。昭和五十年（一九七五）三月十三日、高松市の天然記念物に指定されました。ムクノキは落葉広葉樹で、春、若芽が伸びる頃に白い小さな花をつけ、秋には直径十二ミリメートル程の黒い果実がなります。高松の方言で「モクノキ」「大モク」とも呼ばれています。

大石神社の前は、綱敷天満神社の長い参道となっています。

大　石　神　社

大石さんのムクノキ

綱敷天満神社の方向から見た姿

ムクノキの根元に祀られている祠

【参考文献】

『円座村史』　昭和三十二年三月三十一日　高松市立円座公民館発行
『昔の円座と西山崎　ふるさとを訪ねて』
平成二十二年一月十五日　地域の歴史と文化を考える同好会発行
『古城跡を訪ねて（秋山　忠）高松市の文化財・第七編』
昭和五十七年三月　高松市歴史民俗協会・高松市文化財保護協会発行
『ふるさと再見　高松市の文化財・第十一編』
昭和六十三年三月　高松市歴史民俗協会・高松市文化財保護協会発行

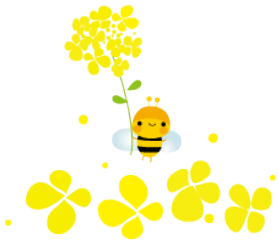
中間町
山崎八幡神社
正花寺
西山崎町
綱敷天満神社
大石神社とムクノキ
堂山
北岡城跡
西山崎町
国分寺町福家
本堯寺
金毘羅燈籠
ことでん岡本駅
奈良須池
1：2,500
0
100m
200m
300m
400m
500m

３月１８日（日）　西山崎町からの復路

ことでん琴平線

（岡本駅）		（円座駅）		（瓦町駅）
12：15 発	→	12：19 発	→	12：38 着
12：45 発	→	12：49 発	→	13：08 着

次回のふるさと探訪は・・・・



テ　ー　マ　弦打周辺を訪ねる

と　　き　平成２４年４月２２日（日）

９：３０～１２：００

集合場所　ＪＲ鬼無駅

講　　師　高松市教育委員会文化財専門員

☆広報「たかまつ」４月１５日号に開催案内を掲載しますので、ご覧ください。

☆天候等により中止の場合のみ文化財課（TEL 839－2660「午前７時～開始時間まで」）でお知らせします。

（電話が通じない場合は、「実施」です。）

★集合場所への交通案内★

【ＪＲ線】

（高松駅）		（鬼無駅）
８：５７	→	９：０４
９：１３	→	９：２０

「ふるさと探訪」に
　　参加される皆様へ

※　参加中は、次のことに充分留意し、
　安全で意義のある探訪としましょう。

1　交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。
（必ず、歩道を歩き、歩道が無いところでは、道路の端を一列で歩きましょう。）

2　無理をせず、体調には十分気をつけましょう。

3　引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。

4　マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気をつけましょう。

5　文化財や自然を大切にしましょう。